

幻の滑走路

弟清二と羽田沖墜落事故 片桐千鶴子

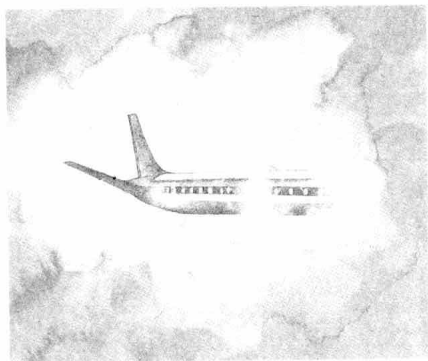


中央公論社

幻の滑走路

弟清二と羽田沖墜落事故

片桐千鶴子



中央公論社

幻の滑走路

弟清二と羽田沖墜落事故

定価八八〇円

昭和五十八年十一月二十五日印刷

昭和五十八年十二月五日発行

著者 片桐千鶴子

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三三四

◎一九八三 検印廃止

ISBN4-12-001258-1

幻の滑走路

弟清二と羽田沖墜落事故

第一章

「たいへんよたいへん……お義姉さんたいへんよ」

深い霧の彼方で、突如、雷鳴がとどろいたような鋭い叫び声に、私は、ハッと目をさました。が、半ば朦朧とした意識のまま、

「なあに……？」

のんびりと訊き返した。

「飛行機が……DC8が墜ちたのよッ」

弟の妻の昱子が、隣の部屋で金切り声をあげている。

「DC8……？」

「そう……清二さんの操縦よッ」

「ええッ！」

私の睡気は、いっぺんにふつとんだ。

「アナウンサーは、福岡からのジャンボ機だといってるけど、あれは決してジャンボなんかじゃ

ない……清二さんのDC8よ」

「まちがいないの？」

「絶対よ……清二さんよッ」

ブラウン管には、細長いDC8機が進入灯の橋桁のうえにまるでそっと乗っけられでもしたかのような恰好でつっこんでいるのが映っていて、そのまわりをたくさん救命ボートがせわしげに往き来していた。機体の前のほうには、ちょうどトンネルのような黒い大きな傷口が開いている。私にも、ようやく事態のおおよそがのみこめてきた。が、突端のあの操縦席の部分は、画面のどこにも見当たらない。

昱子は、清二と結婚する前の三年ほど東亜国内航空のスチュワーデスをしていたことがあって、飛行機のことにはかなり詳しいし、それに自分の夫がこの日、福岡午前七時二十分発の第350便で東京へのフライトにつくことは、妻である彼女自身が一番よく知っていたのである。しかし私は、義妹のいうことを素直に信じることはできなかった。私はパジャマ姿のまま、昱子押しのかけるようにしてテレビの前に坐りこんだ。

「操縦席は……どこにいったの？」

私は、なじるような声をあげた。

「機体の下にめりこんでいるのよ」

昱子が、ひきつった声で答える。

「じゃ……清二は……？」

私は思わず息をのんだ。と、いきなり目の前に、「片桐機長の死亡確認」という文字が映った。続いて、清二の年齢、出身地、飛行時間など簡単な経歴が、その顔写真とともに次々と流し出された。

「ワァーッ」

義妹がしめあげられるような声をあげてソファーにしがみついた。私はただ茫然とテレビの画面に見入るばかりで、義妹を慰めるひとことの言葉すらも出てこなかった。

「こんなときこそしっかりと駄目だよ！」

いつの間にかこられたのか、近所に住んでおられる吉田さん（日本航空・機長・弟清二と同期入社）の声にはふっとわれに返った。

吉田さんは義妹にも声をかけたあと、

「お姉さん、あとで片桐の遺体確認に行ってもらうことになると思いますので、ここにいてくださいよ」

命令するような口調でいわれた。

「わかりました」

私は吉田さんの言葉に懸命に応えるように立ちあがったが、それでもまだ「弟の清二が死んだ」ということが信じられなかった。が、ともかく別府の両親に知らせなくてはと、電話機に手を伸ばした。ダイヤルをまわしながらどう話し出したものかと思案しているうちに、信号音が切

れてひとが出た。母だった。私は一瞬口ごもった。しかし、母はすでに事故を知っていて、

「清二が……清二が……」

と、弟の名前をくり返し呼びながら、ただ泣きじゃくるばかりだった。

「しっかりしてよ。大変なのはこれからなんだから……気をたしかに持ってね」

私はとり乱している母を叱りつけるようにいった。母はしゃくりあげながら、

「うん、うん」

と懸命にうなずいている。

が、私は、母のうなずく声を聞きながらも、清二がどこかで必ず生きているような気がしてならなかった。

そうしているうちに、非番で休んでおられた方々が続々と集まってきてくださった。清二の先輩である原さん（日本航空・機長）をキャップに、電話の係、訪問者の応対係、会社との連絡係など、たちまちそれぞれの役割分担が定められ、鮮やかな手際で事が処理されていった。

ソファーにどっかと腰をおろしてその全般的指揮をとっておられた最年長の岡田さん（日本航空・機長）は、

「お姉さん、片桐はどこかで生きてるよ……絶対に死んでいないよ……」

と、あれこれみんなに指図をしながら、何度も私を励ましてくださった。

しかし、電話がかかってくるたびに私はビクッと身体を震わせた。いつなんどき「遺体確認に来てくれ」といわれはしないかと、そのことだけにおびえていたのである。

そして、どのくらいの時間が経ったときだったろうか。偶然私が受けた電話に、日本航空の者だという声が出て、

「お姉さんですか……片桐は生きていましたよ。救命ボートに乗ってるのを確かめました」

それまでのおびえがいっぺんに消えたような気がして、私の胸は弾んだ。

「まちがいありません……ですが、このことは、もうしばらく伏せておいてください」

相手は一転して厳しい口調になると電話を切った。私は受話器を握ったまま、そっとまわりを見まわした。と、そのときだった。弟にとってもよく似た男が、目の前のブラウン管にはっきりと映った。彼は、周囲の喧騒にはまるで関係のないようなボケッとした表情で救命ボートに乗っている。

へあらっ……清二だわ

私は、あわてて受話器を置くと、テレビににじり寄った。が、清二の姿はすぐに消えて、代りに二十四名の方々の死亡が報ぜられた。私は、大きな丸太棒で頭のとっぺんをいきなり殴りつけられたような気がして、多勢の人たちでごったがえす事故現場を、ただ黙って見つめるばかりだった。

あたりがすっかり昏くらくなったころ、近所の奥さんたちが心づくしの手料理を、夕食にと持ち寄ってくださった。せつかくのお気持だからと思って義妹の昱子を探したが、なぜかどこにもその姿が見当たらない。

へどうしたのかしら……？

私はちょっと変な気がした。しかし、気さくに料理をすすめてくださる奥さんたちの手前もあって、そういつまでも昱子にこだわっているわけにもいかず、私は仕方なくひとり箸をとった。そして、二口、三口、箸を動かしたころだったろうか、主人と、私のすぐ下の弟（清二にとって兄にあたる）がようやく顔を見せた。二人とも、その日の勤務を了えると真っ直ぐにかけつけてきたのだという。が、主人は、箸を握っている私を見て、

「こんなときによくも食事ができるものだね……」

と、まるで別世界の生物でも見るような目をした。私には、主人のその目の意味がすぐにわかった。なんといっても今朝の事故で二十四名の方が亡くなり、百数十名の方々が重軽傷を負われたのである。それなのに、事故の直接の責任者である機長は生きている。となれば、このさき私たち機長の身内の者にどのような難事がふりかかってくるのか……。そうしておののきを胸いっばいに感じとっていれば、およそ食事どころではないであろう。主人はそういいたかったのである。しかし、私はその主人を無視した。そして、今はとにかく食べなければこのあと体がもたなくなると、自分自身に強くいきかせて箸を動かした。

「おまえはとても女とは思えないよ」

私の気持を知ってか知らずか、ぼつんと主人はいった。事実、いわれるまでもなく、私は、この日からただの女ではなくなっていたのである。

夜もふけて電話も一段落し、周囲がやっと静かになった。応接間には岡田さんを中心に五、六人の機長の仲間が残っていてくださった。しかし、これから清二はいったいどうなるのだろうか

という不安は消えなかった。すると、そうした私の気持ちをほぐすかのように、岡田さんが、

「お姉さん……今は、片桐の生きてたことを素直に喜ぶべきですよ。生きてさえいれば、このあとどんな責任のとりかただってできるんですから……」

と、叱りつけるような口調でおっしゃった。私は、思わずホッとしたように小さくあいづちをうった。そして、かねがね清二が、「僕は、飛行機では絶対に死なないよ……たくさんの人たちに對する責任があるもの」といつていたことを思い出した。しかし、そんな日ごろの清二を思い出せば出すほど、私の不安はいっそうつのつていった。私は、応接間から離れて居間のほうに引っこむと、先刻、主人から手渡されたその日の夕刊に目を走らせた。紙面のトップ上段いっぱい、に事故現場の写真が載せられていて、そのわきに「死者24、重軽傷147人、進入灯に激突、機首飛ぶ」と大見出しがあり、次のような記事が続いていた。

——九日午前八時四十五分ごろ、東京・羽田空港に進入中の福岡発東京行き日本航空三五〇便のDC8—61型機Ⅱ片桐清二機長(35)ら乗員八人Ⅱが着陸に失敗、空港手前の海上に突っ込んだ。この事故で乗員乗客百七十四人のうち、二十四人が死亡、百四十七人が重軽傷を負った。同機は着陸態勢のまま、滑走路の南端から三百メートル手前にある進入灯に激突、この衝撃で、機首部分もぎ取られ、胴体部分が浅瀬の海上に浮く形となった。運輸省、警視庁では、直ちに原因究明に乗り出したが、複数の関係者から着陸直前に、異常降下があったという証言が出ていることから、当面この点にしぼって調査する方針である——

翌朝、私は、清二が慈恵医大の附属病院（東京都港区）に収容されていること、また義妹の昱子は昨日のお昼ごろからずっと吉田さんのお宅に世話になっていることを知らされた。私は、昱子がどうして吉田さんのお宅に行くことになったのか、そして、そのことが今までどうして私に知らされなかったのか、不思議に思えて仕方がなかった。しかし、そのいきさつを詮議している余裕はなく、私はひとまず弟の家を引きあげることにした。すると、志摩さんとおっしゃるこれも清二と同じ機長の仲間の方が、ご自分の車で主人と弟と私とを京浜逗子駅まで送ってくださった。「この『グイトーピア』はパイロット集団の住むところですから、空を飛べなくなった清二は、もうここには住めないでしょうね」

「そうかもしれません」

私の問いに志摩さんは苦しそうな表情でボツンと答えられた。

少年のころから飛行機に憧れ、ようやくその念願がかなって颯爽と空を飛んでいた清二は、今大切な翼を失って病院のベッドに横たわっている。いったいこれから、どこへ行くつもりなのだろうか。京浜品川駅で主人や弟と別れ、一人になると、私ははじめて泣いた。

清二はどうしているか、さぞつらい気持でいるだろうと思うと、サングラスがいっぺんに曇って、いくらハンカチでぬぐってもぬぐいきれないほどの涙が、あとからあとからあふれ出てきた。と、私は急に清二のことが心配になった。いったん自宅に帰るつもりでいたのが、矢も盾もたまらずとっさにタクシーをとめて、愛宕山下の慈恵医大へと向った。

「どちらのお見舞いですか。あそこには日航機の墜落とホテル・ニュージャパンの火事との両方

の事故の人たちが入院しているそうですよ」

運転手が気軽に話しかけてきたが、私は、

「日航のほうです」

と、答えたまま、黙って流れいく窓の外を見ていた。もしあのとき「片桐清二の姉です」といったら何といわれただろうか。すでにこの日、弟の「故意説」が新聞紙上をにぎわしており、同様にテレビも週刊誌も、いっせいにこの「故意説」をふりかざして弟を責めたてていたのである。

病院へ着くと私はすぐに事務室を探した。面会謝絶だということは聞いていたので、そのまま清二に会えるとは思ひもなかったが、できれば婦長さんにでもお目にかかって、せめて容態なりとも聞かせてもらうつもりだった。

警備の方に名前を告げ、私の願いを申し述べると、まもなくキリッとした顔立ちの高田という婦長さんがナースセンターから出てこられた。

「わかりました……ここですばらくお待ちください」

そういいおいた彼女は、電話でどこかと二度ばかり連絡をとっておられたが、やがて、「事務長室でお話をうかがうことにしましょう」

と、私の先に立って歩き出された。清二の入院中、弟はもちろんのこと、私たち家族までもがひとかたならぬお世話になった高田婦長との、これが最初の出会いだった。

寒々とした病院の廊下を何度か曲ったあと、高田婦長は、ある大きな部屋の前で立ち止まった。

ノックするとドアはすぐに開けられた。高田婦長につづいて部屋に入った私は、いきなり二人の男性の無遠慮な視線にぶつかった。〈新聞記者だ……〉私は、瞬時にそう感じとった。私は反射的にそこから逃げ出そうとした。が、私の足はなぜか固い棒のようになったまま、私のいうことを聞こうとはしない。私は思わず助けを求めようとして高田婦長のほうを見た。しかし、高田婦長は、私に背を向けたまま窓際の机の前で、中年の男性と言葉を交わしている。私は何度も高田婦長を呼ぼうと思った。ところが、唇だけはかろうじて動くものの、肝心の声が出てこないのがある。私は高田婦長が一刻も早く、私のほうをふり向いてくれるのを祈った。と、私の祈りが通じたのか、高田婦長がひょいと私のほうに体をひねった。

「どうされました？」

高田婦長は私の異変を見とがめると、すぐに私を奥の部屋へ連れこんでくださった。

「ご気分でも悪くなられたのですか？」

「いいえ……新聞社の方が眼についたものですから……」

「そうですか……ここなら大丈夫と思ったのですが、すみませんね」

高田婦長は、心から詫びるようにそういわれた。私はあわててかぶりを振った。詫びるのはむしろ私のほうなのである。もし新聞社の方々の質問せめに会ったら、気持の整理がつかないままに何をいい出すかわからない。私はそんな自分をよく知っていたから、ここしばらくは新聞社のどなたともお会いしたくなかった。それだけに、高田婦長の暖かい心づかいがなによりもありがたかったのである。私はあらためて頭を下げた。すると、婦長さんは、

「せっかくいらしていただいたのに申しわけないのですが、弟さんにはまだお会わせするわけにはいかないのです」

と、本当にすまなそうな声でいわれた。私はもう一度かぶりを振った。

「いいえ、会えると思って来たのではないのです。ただ、しっかりするように、それだけを伝えていただければいいのです」

私はすがるような思いでいった。

「わかりました。のちほど必ず伝えておきますよ、安心してください……」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「二、三日もすれば、弟さんにもお会いになれるだろうと思いますよ」

高田婦長は、帰りかけた私の背に、やさしく声をかけてくださった。

病院を出て時計を見ると、別府（大分県）から上京してくる両親を迎えに行く時刻が迫っていた。二日ばかり留守にしていた家のことが気になったが、帰っている時間の余裕はなかった。

私は、タクシーをひろって東京駅へ向った。病院から東京駅までは思ったより近かった。私は八重洲地下街の喫茶店に入り、コーヒーを注文した。そしてタバコに火をつけた。フワッと立ちこめる煙を見つめていると、昨日からのことがまるで夢の中の出来事のように思えた。しかしそれは決して夢ではなかった。およそ信じられないことが現実起きていたのである。しかも私は、その事故の起った刻限に弟の家にいたのである。年に数えるくらい、それも三カ月か四カ月に一度ぐらいしか泊らない弟の逗子の家に泊っていたのである。「虫が知らせる」と俗にいうけれど、

肉親の血のつながりが私を呼び寄せていたのだろうか。昨夜以来、一睡もしていないのに、私の神経はますます冴えきっていくのだった。

両親が到着する時刻が迫った。私はどんな顔で、また何といって迎えたらいいものか、思案にくれた。が、それは両親のほうもきつと同じであつたろうと思う。私は無手勝流を決めこんで、新幹線のホームへ急いだ。ひかり号は、すでに到着していた。私はあわてて両親の姿を探した。すると、父と母が長いホームの端っこをうつむき加減に歩いてくるのが目についた。列車が着いたあとの、いっときの混雑が消えてホームの人影が急にまばらになったころだけに、年老いた二人の姿は、余計にわびしく映った。私は、無言のままにかけ寄って母の荷物を持った。母も上目づかいに黙って私の方を見て、それから大きくため息をついた。父はうつむいたまま何かブツブツいっていた。ふと気がつくと、二人とも数珠を握りしめている。亡くなった方やご家族に申しわけないと、別府から東京までの道中を二人はずっと般若心経を唱えつづけてきたのだという。私は背中を丸めて小さくなっている父と母を元気づけようと、病院に行ってきたこと、そして清二が元気でいることなど、ちょっとオーバー気味にしゃべった。

が、息子の生存を喜びながらも余りにも多すぎる犠牲者の数に、年老いた両親は、ただただ数珠をまさぐりながらひたすら般若心経を口ずさむばかりだった。

そうした両親を知人の糸川さんの家まで送りとどけたあと、私は洗足池の自宅にもどった。

そして、次の日の夕刻、すぐ下の弟と、立川の妹夫婦が、糸川さんの家に集まった。私たちは